特集 1

健康長寿社会の実現に向けて

背景

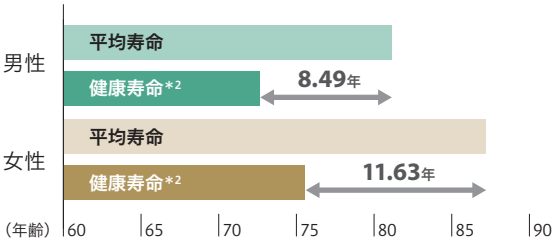
超高齢社会に突入した日本の課題は、健康寿命の延伸。漢方製剤が使用される領域は、着実に拡大

高齢化が進行する日本は、平均寿命が84.07歳[*1]と、世界で最も高い水準にあります。ただし、健康寿命[*2]との差が約10年間あることが課題になっています。ツムラはこの課題に着目し、一人ひとりの心身の調和がとれた健康長寿社会の形成に貢献したいと考えています。その手段として、未病段階の不調に対して処方できる漢方薬の特長を活かし、患者様ごとに最適な漢方治療の実現に努めています。

医療現場では近年、当社の医療用漢方製剤が使われる疾患や診療領域が、着実に広がっています。例えば、体内をめぐる「水[*3]」のバランスを整える五苓散は、心不全にともなう浮腫など循環器領域での処方が拡大しています。加えて、がん治療における副作用の軽減や女性特有の疾患・症状に対する治療など、健康寿命延伸への貢献が大きい領域で、価値の創出に注力しています。

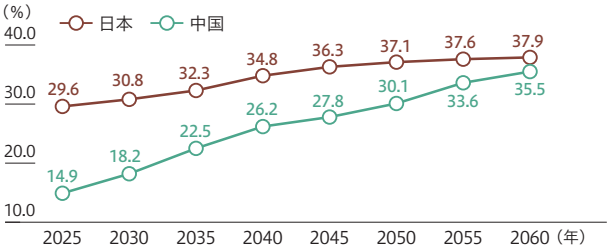
＊1 2022年現在の男女平均値（出所：内閣府「令和6年版高齢社会白書」）
＊2 日常生活に制限のない期間の平均
＊3 漢方医学において体内の水分代謝を指す概念

平均寿命と健康寿命の差



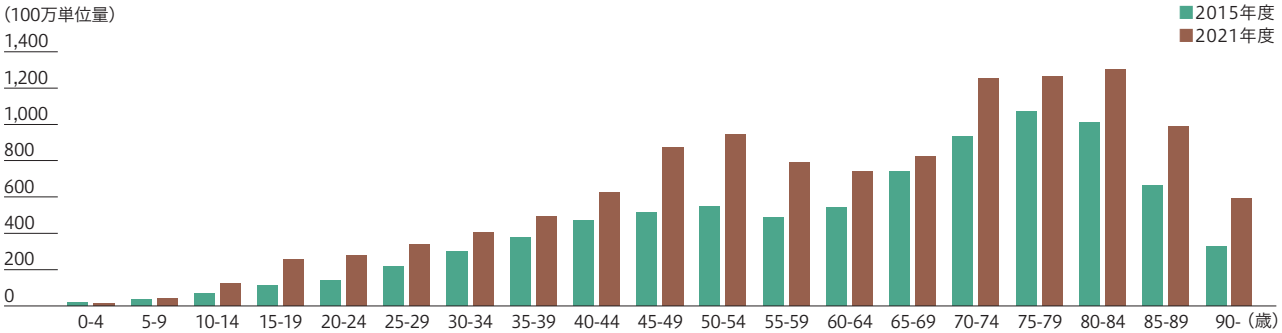
出所：厚生労働省健康・生活衛生局健康課「健康寿命の令和4年値について」をもとに当社にてグラフを作成

65歳以上の人口比率（推計値）



出所：内閣府「令和6年版高齢社会白書」図1-1-6より当社にてグラフ作成

医療用漢方製剤の処方量、過去6年で急増―売上上位100品目が37%増



出所：厚生労働省の第2回および第8回NDBオープンデータをもとに当社にてグラフ作成

価値創造

3つの重点領域を定め、エビデンスの集積によって、診療ガイドラインへの新規収載や推奨度の向上を目指す

ツムラグループは、「高齢者関連領域」「がん領域（支持療法）」「女性関連領域」を重点領域と定め、育薬処方・Growing処方および関連処方を中心に、基礎・臨床エビデンスや処方の使い分けに関する情報提供を継続的に実施しています。漢方製剤の有効性や安全性を中心としたエビデンスの集積によって、診療ガイドラインへの新規収載や推奨度の向上に取り組んでいます。

「高齢者関連領域」では、フレイル、認知症、循環器疾患をテーマに、国立研究機関などと共同研究を実施しています。「がん領域」では、抗がん剤による副作用の軽減に加え、身体で起こる炎症・栄養・免疫に関連する研究によって、体調の改善やQOLの向上を目指しています。「女性関連領域」では、プレコンセプションケア*4に着目しています。月経随伴症状、不妊などライフステージの変化に寄り添い、女性の活躍と生涯にわたる健康に貢献しようとしています。

これらの重点領域を中心に、診療ガイドライン収載の元となる研究エビデンスを、論文などでアウトプットしていきます。

*4 妊娠前から生活や健康に向き合うこと

社外からの期待

高齢者のトータルケアを担う「老年病科」の臨床現場で、漢方製剤の有効性を実感しています

小川 純人氏
東京大学大学院医学系研究科
老年病学 教授

私の専門領域である「老年医学」とは、高齢者の健康維持とQOL（生活の質）の向上を目的とした医療分野です。そして東京大学医学部附属病院老年病科は、高齢者のための総合診療科として、「病気をよくする」だけでなく、「病人をよくする」ことを目標にしたトータルケアを特徴としています。高齢者は多数の疾患を併せ持ち、薬の数が多くなりがちです。また心身機能の衰えにより、尿失禁やめまい、息切れ、食欲低下、転倒などさまざまな症状に悩まされているものの、どこに原因があるのかわからない方も多くいらっしゃいます。そのような患者さんが、老年病科の対象といえます。

漢方医学は、加齢や老化にともなう心身の変化を重視しており、以前から老年医学との接点を強く実感していました。近年は虚証*5やフレイルでみられる症状に対して、多成分系を特徴とする漢方製剤が広く用いられるようになってきました。複数の症状に対しても 漢方薬を中心とした薬物療法で対応できるケースもあります。つまり西洋薬の多剤併用を避ける上でも、高齢者への漢方薬の処方は有効だと考えられます。

私自身、患者さんと向き合う中で、漢方薬の治療効果を実感しています。患者さん本人が諸症状の改善効果を自覚されるだけでなく、同居のご家族や介護者が気づく場合も少なくありません。実際、漢方薬による治療の開始後、「食欲が出てきた」「家庭での会話が増えた」「笑顔をよく見るようになった」といった声を、ご家族から伺うこともあります。こうした患者さんの意欲や生活機能の改善は、介護負担の軽減にもつながるものです。

私たちが推進している研究活動の面では、虚証やフレイルでみられる症状に対する治療効果やエビデンスが多く集まっており、細胞を用いた研究等でも、漢方薬の作用メカニズムが次第に明らかになってきています。ツムラには、西洋医学と漢方医学との併用による老年疾患の治療効果、ひいては運動や栄養をはじめとする非薬物療法との併用によるさらなる効果についても期待しているところです。また、製薬企業として海外における漢方薬の普及や啓発を担える実力を備えており、その手段として海外企業・大学などとの共同研究の加速が重要だと考えます。高齢者の生きがい、社会参加、笑顔のある暮らしを支援する活動に漢方薬を活用する可能性についても、世代を超えて理解が深まるようなアクションを期待しています。高齢者医療における漢方製剤の価値向上に向けて、ツムラが果たすべき役割は今後、ますます拡大していくのではないでしょうか。

*5 体質を表す概念の一つで、体力や抵抗力が低下し、弱々しい状態

価値創造

患者様一人ひとりに最適な「漢方治療の個別化」と、「未病の科学化」実現に向けた応用研究を加速

ツムラ独自の研究パッケージである「KAMPOmics®」は、メタボローム解析*6、トランスクリプトーム解析*7、腸内フローラ解析、システムバイオロジー*8などの先端科学を融合させ、漢方を科学的に解明する取り組みです。多成分からなる漢方薬の複雑な作用機序を統合的に理解することを目指し、患者様一人ひとりに最適な「漢方治療の個別化」と、「未病の科学化」に向けた応用研究を推進しています。漢方治療の個別化の領域では、特定の漢方薬で顕著な効果を示す患者様に共通する特徴の解明や、「証」の診断をAI技術で支援する「漢方診断サポートシステム」の開発に取り組んでいます。

その一例は、「冷え」に関する慶應義塾大学との共同研究プロジェクトです。成人女性の冷え症に関与する遺伝的背景などを解析した結果、2023年に冷え症と関連するゲノム領域を発見しました。今後は、この共同研究を通じて「冷え」に関する遺伝的・生理学的なバイオマーカーを特定し、漢方処方と作用の関連性を客観的に証明することで、標準的な診断・個人に合わせた治療法の確立を目指しています。さらに、その成果を活かして、エビデンスベースの漢方診断サポートシステムの社会実装を構想しています。

一方、未病の科学化においては、未病の状態を定義するバイオマーカーの研究を通じて、治未病・重症化抑制・再発予防の効果を客観的に評価する取り組みを加速しています。これらの研究成果を独自の技術として社会実装し、未病領域における長期的な価値創出につながる投資を強化しています。

*6 生体内の代謝物および漢方薬成分の網羅的な解析
*7 遺伝子発現の網羅的解析
*8 遺伝子・タンパク質・代謝物などの生体因子がどのように関わり合うかに注目し、生体機能を統合的に解明する研究領域

社外からの期待

西洋医学には概念のない「冷え」を解明し、冷え症への理解と治療を医療界全体に広げていく

吉野 鉄大氏
慶應義塾大学医学部
漢方医学センター
全人的漢方診断共同研究講座

漢方医学では、患者さんの主観的な訴えや、身体所見に基づいて、伝統的な診断が行われています。ただし、医師個人の経験・感覚も大きく関わっており、「科学的でない」との批判を受けることもあります。そこで漢方医学センターでは、漢方の診断過程を客観的に捉え直し、漢方専門医でなくとも再現可能な形に近づけるための研究活動を、全国の医療機関と連携しながら進めています。

私は漢方外来で学んできた過程で、多くの患者さんが冷え症に悩んでおられる事実を知りました。特に、漢方薬の服用によって症状が改善し、QOLの向上を実感されている様子を間近で見たことが、深く印象に残りました。この経験から、冷え症への理解と治療方法を医療界全体に広げていきたいとの思いが強まり、研究を開始しました。2023年に、趣旨に同意いただいた成人女性約1,200名を対象に、冷えの自覚症状に関する初の網羅的ゲノム解析を実施しています。その結果、冷え症と関連する複数のゲノム領域を同定することに成功しました。この研究成果は、2024年1月に国際科学雑誌『Scientific Reports』に掲載されました。また、得られた知見をもとに特許出願も行っています。

私たちはこの研究を通じて、漢方医学が長らく取り扱ってきた「冷え」という主観的な苦しみが、生物学的な背景を実際に持つものであることや、分子レベルでの漢方薬の有効性を、科学的・医学的に示したいと考えています。最終的には、すべての医師が活用できる客観的な問診システムを完成させ、個々の患者様の症状に寄り添う医療の土台を築きたいと思っています。

漢方医学の魅力は、患者さんに寄り添う「伴走型」の医療であることです。病をなくすだけでなく、苦しみを減らし、より良い生活を支える視点が、これからの健康長寿社会には欠かせません。漢方はその一端を担うと信じています。

当社は北里大学薬学部健康長寿ゲノム講座の岡田典弘特任教授との共同研究により、未病の科学化のためのエビデンス創出に取り組んできました。そのような中、イントロン・リテンション*9が未病のマーカーになる可能性を見出してきました。さらに臨床研究によりイントロン・リテンションが抑うつ状態の優れたマーカーになることも発見しました。これらの成果を活かし、未病状態を把握し、早期のケアや漢方治療につながる社会の実現を目指しています。

*9 遺伝子の転写産物であるmRNA前駆体から、本来取り除かれるべきイントロン（遺伝子領域のうち、タンパク質合成に使われない部分）が除去されずにmRNA内に残存してしまう現象

社外からの期待

イントロン・リテンションを起こす遺伝子の分析により未病状態の可視化と漢方薬の評価が可能になる

岡田 典弘氏
北里大学薬学部生薬学
健康長寿ゲノム講座
特任教授

人が罹るさまざまな病気は、関わる生体経路が明らかになっているものばかりではありません。例えば老化による体力の衰え、認知症、うつ症状などは、西洋薬では対処が難しいのが現状です。これらの病気・症状には未病の状態が存在するので、漢方薬を用いた未病改善を通じて、新たな価値を生み出せる余地があると考えられます。

2024年の秋、私が所属する北里大学薬学部生薬学 健康長寿ゲノム講座と薬学部附属東洋医学総合研究所・北里研究所病院 漢方鍼灸治療センターとの共同研究によって、イントロン・リテンション（以下、IR）がうつ状態の優れたマーカーになることを発見しました。

うつ状態のマーカー探索は、過去にも世界で多くの研究者が試みてきたのですが、成功していません。一方、私たちはこれまでの研究過程で、生体がストレスを受けた時に、タンパク質の恒常性を保とうとしてIRが起こり、漢方薬によってそのストレスが解除されると、IRが健康状態に戻ることを観察してきました。蓄積してきたこの知見をもとに、IRを起こす遺伝子が、うつ状態の評価、あるいはうつに効果がある薬剤の評価に使えると考え、研究を重ねてきました。そして今回の成果によって、IRは多様な未病状態のマーカーとして汎用性を有することを実証したのです。また、IRを用いれば、未病の種類ごとに漢方薬がどの程度の効果を発現するのかを、IRの回復という観点から評価することも可能です。したがって、今回の成果は未病を得意とする漢方薬の将来にとって極めて大きな意義を持つものと考えます。

また、漢方薬の効能を安定して保つためには、高品質かつ成分が均一な製品の継続供給が不可欠です。これに真摯に取り組むツムラの取り組みは非常に価値あるものだと思います。IRから得られる多面的な情報によって未病の科学化が前進し、結果として漢方薬が社会に対して提供できる価値は、ますます高まっていくと確信しています。

個別化治療を支える「漢方診断サポートシステム」の開発

漢方診断サポートシステムは、漢方医による“匠の領域”とされる「証」の診断を、科学的な裏づけをもとに、高い精度で行えるシステムです。これまでに、過去の診療データを用いたレジストリ研究*10や、証の予測モデルの開発、症例の集積などに取り組んできました。第2期中期経営計画期間では、診断精度の向上を図るために、臨床でのシステム検証試験を実施しています。

本システムの開発によって、漢方診断（四診）と「証」の診断が客観化され、医師による漢方処方の質と効率性の底上げに貢献することを目指しています。また、非漢方専門医向けの教育ツールとしての活用も期待されています。臨床現場での医師の支援用途や、医療従事者向けの漢方教育プログラムでの活用を構想しています。将来的には診断支援機能にとどまらず、処方提案システムへの拡張を検討しています。

*10 特定の疾患を持つ患者様の情報をデータベース化し、分析することで、疾患への理解を深めたり、治療法を改善したりするための研究

CTOメッセージ

展望

グローバルな観点を加えながら、医療課題の解決につながる研究開発を推進していきます

今田 明人
CTO（最高技術・研究開発責任者）
研究開発本部長

ツムラは2025年4月に、グローバル展開を含めた開発機能の強化を図るため、研究開発本部と国際開発本部を統合しています。また、当社として初めてCTO職を新設し、その初代に私が就任しました。

統合後の新しい研究開発本部は、「漢方の研究開発を通じて、グローバルな観点も含めたアンメット・メディカル・ニーズ*11における課題解決や、未病改善システム・漢方診断サポートシステムの構築によって、一人ひとりのライフステージに寄り添っている状態」を目指すというビジョンを掲げました。研究開発組織のあり方としては、個々の研究員が普段から全メンバーの専門分野・知見を認識し、必要な時に適切な人財にアクセスできる状態を重視しています。その上で、全員が内発的動機を持って、自律的な行動を起こしやすい環境整備に努めています。

第2期中期経営計画期間では、長期経営ビジョンに掲げ たPHC（Personalized Health Care）とPDS（Pre-symptomatic Disease and Science）に関して、これまでの研究成果をもとに臨床的な検討を重ね、社会実装への道筋を明確化します。

グローバルでの研究開発としては、まず米国での医薬品開発を進展させます。私たちは、米国市場でアンメット・メディカル・ニーズの一つになっている術後イレウスに長年着目してきました。このニーズに対して、国内向けの「ツムラ大建中湯」と同じ構成生薬から製造する治験薬「TU-100」の開発・上市に取り組んでいます。2024年5月に、全米36施設で402例を対象とした第Ⅱ相臨床試験を実施しており、世界的にも難易度の高い米国での上市を目指しています。

今後の成長ドライバーである中国事業では、生薬の種苗から最終製品までの漢方バリューチェーンにおいて、医薬品グローバルスタンダードであるICHレベル品質標準の策定に取り組むとともに、その品質基準に準拠した中成薬の開発準備を進めています。

国内事業の成長を支える柱の一つになり得る「漢方診断サポートシステム」は現在、臨床での検証の準備に入っています。本システムは、熟練した漢方医学知識を必要とする漢方診断の標準化を可能にするものです。実臨床における問診と、「証」に基づく漢方診療をサポートする機能によって、医療現場の生産性向上に大きく貢献できると見込んでいます。さらに、漢方医学に関心のある医療関係者向け教育コンテンツへの展開など、幅広い可能性を見出しています。

なお、当社は第1期中計期間中に、慶應義塾大学との共同研究プロジェクトを立ち上げ、冷え性の遺伝的要因を発見しています。その成果を「冷え性判定方法、及び冷え性タイプ判定方法」として取りまとめ、2023年に特許を申請しました。前述の「漢方診断サポートシステム」に、今回のような明確な根拠を持つ研究成果をかけ合わせることにより、長期経営ビジョンに掲げたPHCとPDSを、少しずつ実現に近づけていきます。

中国最古の医学書と呼ばれる『黄帝内経』には、“聖人は既病を治すのではなく、未病を治す”と記されています。しかし現代医学では、そもそも「未病」の客観的な定義と指標が定まっていないのが現状です。だからこそ、漢方医学・漢方薬に元来備わっている「未病」の概念を、エビデンスによって明確に定義する取り組みは、漢方医学の発展と、漢方薬のさらなる普及につながると考えています。中でもイントロン・リテンションは、まさに未病の定義に通じる研究テーマだと捉えています。すでに北里大学による研究・解析によって、イントロン・リテンションは未病マーカーとしての大きな可能性が見い出されています。第２期中計では、抑うつ状態やフレイルを中心に、漢方を用いた検証試験を産学共同で実施します。並行して、検査サービスとして社会実装するための技術開発にも着手します。将来的には未病の科学化が、女性領域・高齢者領域における社会課題の解決につながる取り組みとして評価されるよう、研究開発を継続していきます。

*11 いまだ有効な治療法が見つかっていない疾患に対する医療ニーズ

FOCUS 漢方市場の特徴

国内市場の動向

日本国内の医療機関で処方されている漢方薬の大部分は、健康保険が適用される「医療用漢方製剤」であり、計148処方が厚生労働省に認可されています。医療用漢方製剤は、医師の診察のもと処方され、日常診療において8割以上[*1]の医師に使用されています。

医療用漢方製剤の市場は、1999年度を底に着実に拡大しています。2024年度の医療用漢方製剤の市場規模は、薬価ベースで2,280億円であり、医療用医薬品市場11.5兆円に対して、約2.0%の割合です。その医療用漢方市場におけるツムラグループのシェアは84.6%[*2]になっています。

*1 出所：日本漢方生薬製剤協会「漢方薬処方実態調査2011」
*2 出所：Copyright ©2025IQVIA.「JPM 2024年4月～2025年3月」をもとに独自に集計（無断転載禁止）

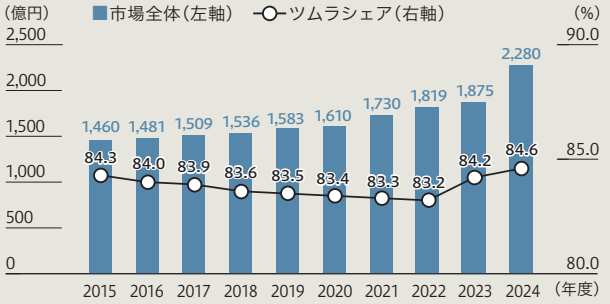
市場へのアプローチ

当社グループは、129処方の医療用漢方製剤を製造・販売しています。国内トップのラインナップを有しているため、対応可能な診療領域が広く、現在は、ほぼすべての診療科で当社製品が使用されています。

また、漢方治療は、患者様一人ひとりの体質や病状に合わせてさまざまな薬を使い分けることが特徴ですが、漢方医学を専門としない医師も漢方製剤の処方が可能なため、漢方医学そのものの普及が重要になります。したがって、当社のMRは、医療関係者に対して、製品の安全性・有効性・品質に関する情報提供のみならず、漢方医学の考え方に基づく処方の成り立ちや使い分けの浸透活動も行っています。それによって、患者様がどの医療機関・診療科においても、一人ひとりに合った漢方治療が受けられる医療現場の実現を目指しています。

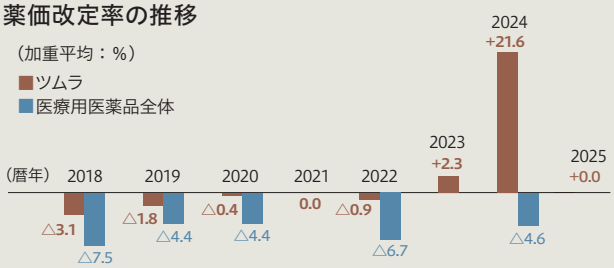
さらに、医療用漢方製剤の投与比率は65歳以上の高齢者が半数を占め、世代を問わず女性が高くなっています。当社グループでは、日本における喫緊の社会課題である高齢者関連領域、がん領域（支持療法）、女性関連領域を重点領域に定めて、情報提供の量と質の向上に努めています。

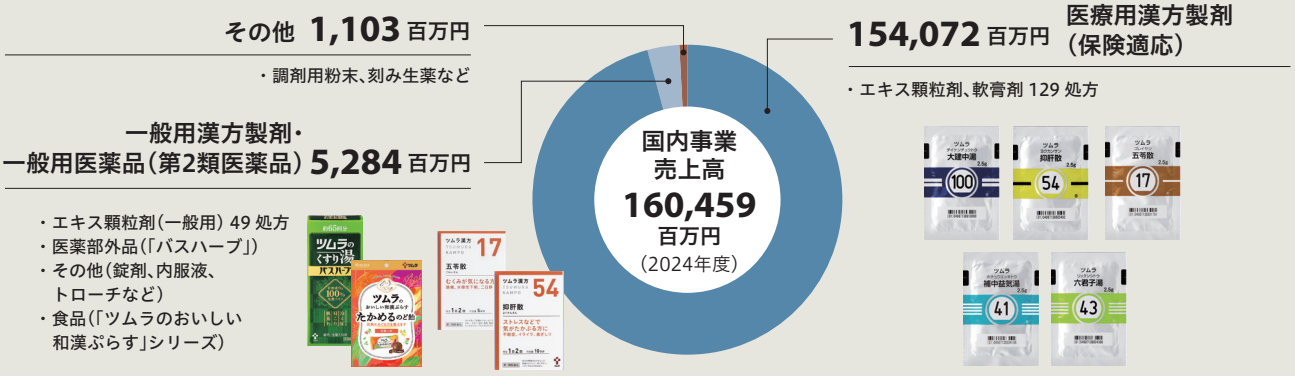
医療用漢方製剤の市場推移（薬価ベース）



出所：Copyright ©2025IQVIA.「JPM 2024年4月～2025年3月」をもとに独自に集計（無断転載禁止）

薬価改定率の推移



※ 2021年、2023年、2025年は中間年改定のため、医療用医薬品全体の改定率は非開示

国内事業の製品ラインナップ